



若き日の益田先生

亡き益田学先生を思う

市野瀬

仁

(会員・佐伯市長島)

二月十七日、弥生町中央公民館において益田学先生のご葬儀がしめやかに催された。先生は満八十才であった。祭壇の中央の高い位置に年をめされた写真が安置され、下段の前面には菊の花が一ぱいに飾られていた。県内外から来られた浄土宗派の住職五名の荘重な読経が館内に響きわたった。読経と読経の間に、三十名ばかりからなる婦人のご詠歌と鐘の音が妙なる調べとなって、葬場の隅々まで流れていった。

先生は佐伯史談会の顧問であった。

私達史談会員の前に席をとっていたのは医師の方々が多かった。その中の一人が、足どりもどかしく、おろおろした声で弔辞を読み上げた。東京帝国大学医学部の

同級生で、大分市出身の小林という人であった。大正時代、地方から出て東京の大学に学ぶ学校生活や学生間の心理の複雑さが彷彿ほらふたとして浮かび、会葬者の耳をとらえてはなさなかつた。

同級生は終生をこえてよいものである。もつべきものはよき友なりである。

これより、地味な先生に対して、私の文章の一部にオーバーな箇所のあることを奥様を始め、読者に対しておことわり申し上げます。

先生と私

二十才以上も年齢差のある私の、先生に対する一番最初の記憶は、私が小学生の頃であった。黒の編み上げの

長靴をはき、黒のオートバイに乗って、さっそうとして
応診されていた姿であった。その頃、鼻の下にチョビ鬚
を生やしていたような気がする。

その後、私も長じて先生とじかにお会いして、顔がハ
ッキリするようになった。ほんとうに品のある容貌の人
であった。映画俳優に例をとると、上原謙は線が細く、
きざっぱい。山村聡は^{かっかく}恰幅がよすぎる。佐分利信は苦味
走った点は似ているが、やゝ暗く、突き放したような話
ぶりで、ニヒルのところがある。とはいっても容貌では
佐分利信が一番近いだろう。先生の品のいゝ容姿から、
おだやかな口調で病状を聞くと、それだけで安心しき
った気持ちになってしまう。ずいぶん、多くの女性の心をゆ
さぶったことだろうと思う。

先生と私は同じ弥生町出身のことでもあるし、縁の深
い方であったと思う。私の長兄が、先生と教育委員を長
くしたため、家族同伴の旅行もされたし、次の兄が佐伯
中学時代の同級生であった。昭和二十八年頃、私が昭和
中学校に勤めていた時、放課後のころになると先生がテ
ニス・コートに顔をだされる。私はこの時、先生のフォ
ームを見よう見真似で学んだ。自然に腰をおとし安定し

たフォームと、主として前衛がするスマッシングの切味
は真似のできる者はいなかった。

あれやこれやで、先生のお内にお邪魔になり、私の家
にもおいで下さったことが何回かあった。いつの頃であ
ったろうか、私の家で八ミリの映写をして下さったこと
を思いだす。当時はカラーフィルムは珍しかった。ミヤ
マキリシマの咲きほころびる美しい山々が映しだされた。
そこには、仏様のような顔をしたやさしい奥様や、知人
が戯れ遊んでいた風景であった。

ある時、病院で私はこんな質問をしたことがある。

「私は五十キロもないのですが、先生どうしたら太りま
しょうか。」

「あんたが四十才台になると少しは太くなるでしょう」

しばらくして、

「よくご飯を噛んで食べてみなさい」

言われたとおり、四十才台になって腹が出ばり、顔も
丸くなった時期があった。

先生はたずねれば話されるが、先生の方から話される
ことはめったになかった。しかし、一旦気が合い、興味
にのれば、おだやかな口調も少しは早くなり、話しつづ

ける癖があった。

ある時、伸び伸びとした雄渾な書体の古文書を持ち出され、「誰の書であろうかとだいぶ調べたところ、中国の岳飛（文武にすぐれた中国南宋時代の將軍。今日、中国の民族的英雄としてあがめられている。）の筆であることがわかってね」とたずねもしないのに話しだす話は、めったに見られない喜びのそれであった。そう言えば、先生からいただく年賀状の宛名の「様」の字は「お年玉くじ」の上にたいてい書かれていた。先生は岳飛の書体を好まれていたのであろう。

私が「元田の歴史」について調査をしていた時、元田の古塔群や、市野瀬の庄屋についてご意見を聞きにいった時だから昭和五十二年頃であった。久しぶりにお会いして見た先生は、背がひどく曲がり、ふけこんでいるのに驚き、非常に淋しさを感じた。

「先生ぜひ調べたいと思われるところはありませんか」
「櫻野の墓地について調べたいんですがねえー」と力のない返事がかえってきた。今考えてみると、これが先生と直接お話しした最後であった。

私が国東の高等学校から佐伯豊南高校に転動した昭和三十八年頃、生徒数人と共に佐伯史談会に入会して、郷土の歴史探訪に加わった。

初夏であったか、佐伯史談会は大入島の日向泊にある神ノ井を見学した。先生は平たく丸味のある小石を一ぱい網に入れたまゝ肩にかついで、じいっと石碑を見つめておられた。そしてそのまゝの姿で記録をとり始められた。かなり長い時間であった。この時の小石が奥様の一石一字大乘妙経写経のためのものであったことも、先生自作の

神の井の浜の小石のめでたさに

遠き神代の昔おもへり

の歌もこの時のことであったことが『郷土佐伯の碑文』の書物によって知り、独りうなずいてしまった。

先生は無心になりきる人であった。そして抜群の集中力のできる人であった。一つの歴史探訪でも、これとは思うものは時間を忘れ、一行の行動も忘れて、そのものに没頭された。だから、一行にはぐれることは多かったが、人に迷惑をかけることはあまりなかった。

先生の四十九日がすんで、四月六日、益田邸を訪問した。生前、いろいろとお世話になりながらお見舞もしいで、お別れしたことを詫げる意味もあった。また、先生の想い出の記を書いてみたいために、私のイメージがたしかなものかどうか、たしかめたい気持もあった。

「今日は先生のこと、いろいろお聞きしたいのですが、失礼なことがありますたらどうぞお叱り下さい。お返事しなくて結構です」とことわって、奥様と一問一答をした。

奥様と私の対談

「先生は昔、黒のオートバイに乗っておられましたね、機械ものが好きだったのでしょうか」

「そうです、修理屋にもっていくより内うちでする方がいゝといつて、私を助手代りに使つてね」

「先生は専門書以外に読書はどんな種類が多かったのでしょうか」

「いろいろありましたが、よく将棋の本を読んでいました。主人はこり性でねえ、江戸幕府の橋本宗桂の『詰むや詰まざるや百番』という詰将棋を何年かかって解いた

と喜んでいました。」

「書はどなたか師につかれましたか、先生の字は実に伸び伸びとした書風でしたが」

「杵築にいた頃、少しばかり師につきました」

「先生はみるからにおだやかで、落着いていらっしやうた方でしたが、外科を専攻されたのは手先の器用さもありませんが、剛腹な面もあったのではないのでしょうか」

「サア、性に合っていたのでしょうか」

「時に、先生は思ったことをずばりという、いっぶう変わった野人風の人と話があつておられたようですが」

「そうそう」

先生は山の猟を楽しんでおられたので、あらげずりの猟士とつき合い、それで解放感を味われたのであろうか。

「先生は人ごとを言いませんでしたね」

「ハイ、言葉には責任を持つてと言いましてね、私が公私の相談ごとを受けて、時間が遅くなつても、わけを聞くでなし、小言も言いませんでした。」

「先生は無口な方ですから、講演などされたことは比較的少なかったでしょうか」

「ハイ、それでも御手洗良策先生が上野小学校の校長の

とき、子供に話しをしてもらいたいとたのまれました。

主人は数学が好きでした。それで物を「噛む」ということについて話したそうです。例えば、米を一粒噛むと切断される。切断されると面積が増す。次々と増していけばいくほど、唾液が切断面にとりまいて消化をよくするということを、黒板に図解して説明したそうです

「先生はものにこだわりませんでしたねえ」

「こだわりませんでした。そして、むづかしい場面に出合っても沈着でした。それから、晩年になって患者に対しても、思いやりがあったようです。いゝことばかりが残ってあきらめられないのです」

「お宅は禅宗と書いていました、お二人とも禅味をおびたふんいきをもたれていましたので」

「まあ夫婦は似てくるのでしょうか、ハアハア……」

「先生は容貌も立派だったので、ずいぶん女性から注目されたことでしょう」

奥様の表情が妙にやわらかいので、

「奥さん、先生の若い時の写真を見せて下さいませんか」と話題をかえた。

「他人の写真は撮ってやるのですが、自分のは少いの

すよ」と言われながらアルバムを何冊か出されている中に、一枚の写真をとり出された。佐伯中学の同級会の時のものであった。五十才台のものであろうか、十五名の中央に凜凜しく写っておられるのが表題にある写真である。私は何冊かのアルバムの中に、旅館に寛いでいらっしやる先生が、佐分利信そっくりのを見つけ出して独りほくそえんだ。

「宗教や哲学についてはどのようなお考えでしたか」

「お寺がお招きした高僧の話など素直に聞いていました」

「先生は特別尊敬された方がおありでしたか」

「戦時中のことですから、杵築にはえらい方が東京より帰っておられました。中でも、前天台勧学大僧正、元大

正大学教授二宮人師について梵字の指導を受けました。

その方の感化は大きかったようです。」

先生の著書『郷土佐伯の碑文』の末尾に奥様が書かれているように、佐伯中学時代の校長、今村孝次先生の漢文の指導が上手だったので、先生はその方面に興味を持たれたらしく、得意の教科となられた。その上、歴史の町、杵築に生まれたことが人に恵まれ、所を得たため郷土の歴史に興味と関心が深まり、石碑の拓本や古文書

の解説に情熱を捧げる結果となった。

『郷土佐伯の碑文』について

思うに、碑石はよほどの意味があつてこそ建てられるものである。それを一般の人に、正しく、分りやすく読めるようにされたことは村の歴史教育であつて、碑石の建立に勝るとも劣らない意義深いものではなからうか。しかも、碑文の誤謬を指摘し、註釈するに至つては、深い学識に自信と情熱がなければできないわざである。それ故、誰でもできる仕事ではない。

何んとなれば、その行為は一つの発見につながるからだ。「梅園学会」の顧問である湯川秀樹博士が、安岐町にある三浦梅園の旧宅を訪れたさい、梅園の業績を讃えた言葉に「世には学者は多いが、ほんとうに自分自身の頭で考え創造し、発見した学者は数少い。その点、梅園の獨創性には敬服の外はない」と述べられている。

先生が詰将棋百番の難問を何年もかゝつて解いたことや、金馬橋の碑文の中にある「考」の一字を数年間探し求めて、やっと解決されたというエピソードは実証せねばやまない科学者としての先生らしい姿であつた。徹底したこの実証的精神を先生の第一の眞価とみたい。奥様

の話によると、碑文はいつも枕元に置いておき、思いだしては起き上り訂正を加えられたという。

このことで思い出す医学者二人の例がある。

江戸時代の後期、杉田玄白、前野良沢（中津藩医）はターヘル・アナトミアというオランダ語の解剖書を四年の才月を経て日本語に翻訳した『解体新書』がある。これはわが国の西洋医学紹介の草分けとなつた。八十三才になつた杉田玄白は、蘭学草創の頃を思い出して書きつゞいた「蘭学事始」の中に、その苦心談が記されている。それは、フルヘツヘンドの一語を訳するのに、顔の中の堆うづたかの意味からやつと鼻という訳を何日も何日もかかつて発見したというのである。

もともと、解体新書は先輩格の前野良沢の家で研究がすゝめられ、すべて彼がリーダーであつた。名利など恬淡な良沢は自ら自分の名を出すことを嫌い、杉田玄白の名前はあつても良沢の名は記されていない。『郷土佐伯の碑文』も『佐伯史談』には紹介されたが、一冊の書物として出版されたのは、先生の意図ではなく、弥生町の佐伯史談会員で古藤田太氏等の好意によつて世に出たものであつた。同じ医学者として相通するものを私は感じる。

先生は『郷土佐伯の碑文』のまえがきに「私は正確を

期する為と其文学を鑑賞する目的で碑文はなるべく拓本にとり、仔細に検討し碑面文字の時代性や書体等をも伝へるよう努力した……」と述べられている。

先生は、この仕事をすれば社会のために役だつとか、これを発表すれば人も喜ぶであろうし、自分の名誉にもなるし、充足感をもつ等、たいいていの人が持つであろう当然の感情さえなかったように思えてならない。文学評論家の第一人者として異色の存在にある小林秀雄は「人の為社会の為とか、とりたてゝいうよりも、自分の好きなものに没頭し、努力しつゞけていけば、自ずと人の為になるものだ」と言っている。先生はそれを地でいかれていたのではなからうか。

東京帝国大学医学部を卒業されると同時に同大学医学部付属小石川分院外科医局に勤務されること五ヶ年、親の言うまゝに郷土に帰られ一生を田舎で過ごされた。多い博士号の肩書などいらぬ。それでも佐伯・南郡の医師副会長に推薦されればあえて辞退もしない。実は、ごく自然に生きる。私は思う。私達、佐伯史談会員がそうであったように、佐伯・南郡地区の医師会においても、先生には一目も二目もおいていたのではあるまいか。奥様と話しているうち、「そんな名利など悟りきつていま

した」と、アッサリ言いきつたのが印象的であった。

私の察するに、こうした無欲の点は先天的なものがかなりあると思う。例えば、学生時代から高等学校や大学受験においても、ガリ勉型でなく、人を相手にせず、静かに頭を休ませ、抜群の集中力をもって効果を収めたタイプではないかと思う。しかし、前述したように戦時中、杵築での生活が先生の歴史観・人生観に強い影響を与えたのではないだろうか。先生は書に関心をもたれ、書を愛しておられた。そして梵字の研究や拓本の作業を通して、仏教の深奥の世界に浸っておられたように思う。

道徳家で偉大な常識人として知られた聖人、孔子の生き方より、人生を無為自然としてとらえた老子の生き方に先生は近いように思う。わずらわしい俗界に住んでとらわれず、悠々と天空を飛ぶ鳥のように無欲に人生を楽しんだ自由の人孤高の人というのが、先生の第二の真価とみたい。奥様は、先生とのお別れに『郷土佐伯の碑文』の書物の裏表紙に

達観す八十才の寿命かな

の一句を書き送り胸に抱かせて棺を覆われたそうである。二時間ばかりお話をしして帰り際に、再度、仏前に合掌して主なき益田邸を後にした。

徳光院仁誉誠道顕学医翁大居士

(おわり)